



# 波間の声

12月3日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 12月3日のおはなし「波間の声」

「ああ。これは1976年のものだ」

「30年物ですね」

隣の客とバーテンダーの会話に興味を引かれて、何気なく客の手元のグラスを見るが、それはカクテルグラスにしか見えない。ワインでもスコッチでもバーボンでもなさそうだ。

「しかし、よくこういうのを思いつきますね。感心しますよ」

「いやいや。お客さまが上手に飲んでくださったんですよ」

そこまで聞いて新しいカクテルだとわかる。

「マスター、新しいやつ？ 飲みたいなあ」

「大丈夫ですか？ 今日はもうかなり飲んでますよ」

「どうせ、外は大荒れなんだから」

しょうがないなという感じでうなずいてマスターはカクテルを作りはじめる。けれど名前を確かめもせずに飲むとろくなことがない。

台風が過ぎた翌朝は何もかもを洗い流してぴかぴかの、まっさらになったような青空で、ぼくは家族にねだって海岸に向かう。こういう朝は流木だとか、大陸からの漂流物とか、海流に乗ってきた南の島からのヤシの実など面白いものがごろごろしているのだ。母が草月流の先生をしていた関係もあって、流木をはじめ、珍妙な形をしたわけのわからないものを拾ったりすることが、我が家においては奨励されていた。一般の家庭なら子どもが「とっても面白い形だから」と拾ってきて、「こんな汚いもの拾ってきて、どうするつもりなの！」なんて叱られて、たちまちゴミに出されるのがオチだろうガラクタでも、我が家ではじっくり検証され、捨てられることはまずなく、時には母から頼み込まれて渋々譲ってあげるなんてこともしょっちゅうだった。

その日はまだ波が高く、潮も引ききっていないらしく、いままにいろいろなものがうち寄せられている最中だった。漂流物を拾うのに最適な時刻はもう少し後のようだった。当初の目的とは違ったが、うち寄せる高い波はぼくを興奮させた。気をつけろと言う家族の言葉などほとんど耳に入らずぼくはズボンのすそをまくり上げると海の中に入っていった。大して歩かないうちに太股のあたりまでずぶぬれになり、それでも波の力と張り合うスリルと興奮の方が上回った。

もう、そのくらいにして戻ってきなさい。家族の声に振り向き、大丈夫だよと笑って手を振った瞬間、後ろから大きな波に突き倒され、たちまち前後上下左右何もわからなくなった。水を飲みかけあわてて口を閉じ息を止める。光がぐるぐる回り、身体の形がなくなってしまったのではないかというほど揺さぶられねじまげられ、パチパチ弾ける音やジャバジャバと濁った水音の、遙か向こうのどこからか深いうなり声が聞こえてきた。息をしたくてもできず喉元がつまり、光がどんどん遠ざかり始めていた。

家族が叫ぶ声が聞こえる。けれど関係ない人たちが上げる歓声が響き渡って、家族の叫びはかき消されてしまう。すぐ耳元では低い声がする。「もうお腹いっぱいだ」そして身体がぐっと持ち上がり波の上に出る。ぼくは激しく咳き込み、ほとんど戻しそうになり、ようやく呼吸ができるようになる。ヒロちゃんヒロちゃんと泣き叫びながら母が駆け寄ってくる。低い声がつぶやく。「また来るといい。嵐の翌朝に」身体を支えていた力がなくなり、ぼくは再び波の中に飲まれそうになるが、さっきまでほどの激しさはないのですぐに立ち上がることができる。

母に抱きしめられながらぼくはものすごい恐怖で震えている。もう二度と海になんか来るもんかと思っている。あいつが待っているから。今度はお腹を空かせて待っているから。引きずられるようにして浜辺に戻り、ぼくは放心状態で座り込み、じりじり日に灼かれながら過ごした。帰ろうと家族に促されても、なぜかその場を離れられずぼくは首を横に振った。ぼくは海をにらみつけ、あいつの正体を見ようとしていた。でももちろん誰の姿を見ることもできない。海風がわたり、ヒリヒリし始めたぼくの頬をなでる。

「大丈夫ですか？ ひどい汗をかいてますよ」

「1968年のあの浜だ。うちから歩いて10分とかからない。5歳の、あの日の海だ」  
「あまりいい経験じゃなかったみたいですね」  
「二度と海には近づかないって決めていたのに」  
「なんですって？ それを知っていたら……」  
「何？ これ、なんてカクテルなの？」  
「申しわけありません。『海風の記憶』というんです」

(「海風」 ordered by エルスケン-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 波間の声

<http://p.booklog.jp/book/39938>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39938>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39938>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.